

臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成15年(2003)新春号



新潟県立村松高等学校東京同窓会

No. 34

明けましておめでとうございます。

私の考え方

今、この稿を起こしているのが10月の下旬である。会報34号・新春号への挨拶文を書けとの注文であるが師走にも新年にも程遠く、何の感慨も浮かんで来ない。従って、思いつくまゝ書かせていただくことにする。

先の会報に、今年もまた荒れるであろうと書いたが、予感は当たったようだ。それにしても今年は特に酷かった。北朝鮮による拉致の問題も、やっと糸口についたばかり、今後どう進展するか国民の一大関心事である。この点、私は小泉首相を一応評価する。今まで誰もやってこなかったからである。あまりにも我が国の政治の貧困・外交の弱さを感じる。強い政治家が出ないものか！

衆参両院の補選が行われ、各政党が勝った負けたと騒いでいたが、党より人、候補者の人格・識見が一番大事であるということをおぼれている。誰でも良いと言うものではない。だから棄権が多い。二世・三世・秘書上りの立候補はやめたほうが良い。今年のマスコミを賑わせた四人の田中さん。ノーベル賞は別として、他のご三人は(前外相、長野知事、外務省局長)何れも自己主張が強く、周囲との対話、融和に欠けてる点が共通と、強く印象に残った。(局長は職務上とも言えるけれども)

新しい役員に期待

旧年中は東京同窓会に格段のご理解とご協力を頂き、誠に有難うございました。本年も宜しくお願い申し上げます。私が同窓会東京支部の仲間に加えて頂いて、初めて大会に出席した時には今と比べて集まった会員数もそれ程でなく、会の進行や内容等も今一つと云った処でした。然し初めてながら顔見知りの方も幾人か居られ、懐郷の思いを同じくする者同志が過ごした幾時間で、大いに気持ちがあふかれました。単細胞で感激性の私はあの時の雰囲気にかかれ、毎年大会に出るのが楽しみでした。それから二度支部長が替わりましたがその間、東京支部の体制その他に大きな変化は見られませんでした。やがて卓越した識見と、独特の話し方を持った行動派の佐伯現会長が、衆望を担って登場されました。名伯楽の下、東京支部は変わりました。これ迄よりも旧高女の方々や高卒の人々を多く役員に起用し、会の名称も「村松高校東京同窓会」と改めて、会員皆の心の拠り所となる様に同窓会の輪の拡充を目指しました。年と共にその努力が結果となって現れ、高い評価を得て居ります。

然しこの同窓会にも今課題が有ります。それは会員の高齢化と会員数の横這いです。因みに旧村松中学校は、

東京同窓会 会長

佐伯 益一 (旧中27)

さて、ここで話を小さくしよう。平成14年は役員改選の年であった。結果から先に言えば、今期もまた私が会長を務めることとなった。

昭和58年6月の大会で支部長に指名されてから実に19年が経つ。それ以前の平役員の時期を加えれば遥かに30年以上は東京の同窓会に関与していたことになる。愚直ながら、私なりに働いてきたつもりであるが大過が無かったのは先輩・同輩・後輩各位の加護、協力があつたからと感謝している次第である。12年の改選の時も辞意を表明したが、会長は何もしなくてよい。我々がやるから、ということで承知したが現状は変わらなかつた。私が前面に出過ぎたせいかな。この度の時も同様。然し今度は違つた。この一年、役員の方々が目覚しく動いてくれた。これが本当の活性化だなと頼もしく、嬉しく思つた。時代は高校卒の世代である。今後、自由に活躍して欲しいと願つている。私は棚の上に座つて居るだけで良いのである。最後になつたが、同窓並び関係各位、越年、迎年するに当たり、くれぐれも御自愛、常に健在であれと祈り、考えの一端を述べてご挨拶に代える。



東京同窓会 副会長

伊藤 勇五 (旧中33)

昭和23年に第33回の卒業生を送り出したのを最後に新制高校に移行しました。この最後の卒業生が今

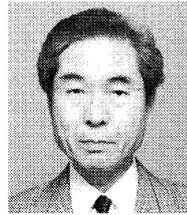
72才で、確実に高齢化が進んで居

ります。旧村松高女の場合も同様と思います。東京に於ける松高関係の同窓会に「赤山会」があります。旧村松中学校を卒業された方々だけの親睦の集まりですが高齢化は此方も進んでおります。当然ながら東京同窓会の会員であり大切な存在ですが、高齢化が一番気掛かりです。皆様には更に尚一層お体に気を付けられて、長く会員として頑張つて下さる様をお願いするや切です。高校は昭和24年の第1回からすでに54回卒業生を送り出しています。それから見ると高校卒の会員はまだまだ少なく、多数の方々の参加を希望してやみません。幸い今度の改選で新役員が増え、強力な体制が整いました。会員増強と言う課題の取り組みに期待が高まります。高齢に向かう会員の方から、年を忘れて毎回参加を楽しみにされる様な会の在り方の検討と、また新しく入会された人達が魅力を感じる様な会の充実に力を注がれる様、研究・努力を新役員の方々に是非お願いしたいと思います。



副会長 鈴木 多喜男 (高4回)

新年を迎え、又一つ年令をとったなあ!!と思うのもよし!!今年も頑張るぞ!!と意欲的に生きるのでは大差があります。人間には生まれながら、三つの知恵が備わっています。



一つ目は生まれながらに親から授かった天の恵みの「天知」です。

二つ目は、学校で学ぶ「学知」です。

三つ目は、世の中に出て幾多の困難を経験する「困知」です。

日々私達が直面して過しているのは、困難の中から力強く生きる喜びです。喜怒哀楽は、人生でさけて逃れないものです。もし「怒哀」を削去すれば、人生「喜樂」になります。「喜樂」な人生でなく、毎日を充実したライフスタイルを送りながら「三知」をモットーに過したいものです。新年にあたり私の信条と致します。

副会長 深見 洋子 (高7回)

この度、副会長を仰せつかりました。私は、この東京同窓会が「安らぎの場」であれば、と思って居ります。毎年六月の大会に集まった同窓の方々が、心から楽しみ安らぐ事が出来、そして再会した方々との輪が広がり、何らかの進展に繋がる事を願って居ります。分不相応ではありますが、二年間宜しくお願い致します。



財務委員長 塚田 勝 (高8回)

この度、財務委員長の指名を受け任務の重さを大変感じております。過去十数年間に渡り、監査役として会員の皆様から大切な会費を預かり会の運営に参加させて頂きました。一時は大切な預金も底をつき、これからの運営は・・・の時期も有りましたが、皆々様のご協力により、この十年間余り内容も、充実し、安定してまいりました。これから将来とも、同窓会を楽しい学生時代の思い出の場、現代社会の厳しい時代を話し合うオアシスの場として、気楽にお集り・活用して頂けたらと思います。その為にも財務委員会として、金銭出納簿、経費の管理、預金通帳の保管・管理、会費の請求と受領の処理、決算書の作成等々を正確に報告出来る様に努力したいと存じます。尚、同窓会の所有する物品の保管・管理・責任を持ち微力では御座いますが、成し遂げたいと思いますので、ご協力の程お願い申し上げます。



副会長 沢出 起允 (高6回)

平成14年度の役員改選で副会長に選任されました。責任の重さに重圧を感じております。はなはだ微力で頼りない者ですが、東京同窓会の為に役立てるよう努力して参りますので、よろしくお願い致します。東京同窓会は会員の高齢化が進み、年々会員数が減少しております。新規会員の発掘と休眠会員の復活が重要な課題であります。幹事の方をはじめ会員皆様のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

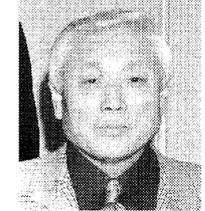


総務委員長 金子 鶴男 (高5回)

謹んで新春のご祝詞を申し上げます。皆様には幸多き新年をお迎え、心よりお慶び申し上げます。

「有構無構」(かまえありて、かまえなし)宮本武蔵は「五輪書」の中で太刀の持ち方は、あいてどの場所・条件・状態によって、どのような持ち方をしようとして全て相手を斬るのに都合の良いようにすべきであると、徹底した実用主義を追及し、本来の目的を忘れた形式主義への鋭い批判をしています。

さて、関東近郊の卒業生の皆さん、東京同窓会は堅苦しくなく、自由で楽しい会です。ぜひ、ご参加ください。そして、卒業生が一体となって、今までにない「夢とロマン」のある同窓会をつくっていきたいと思っています。



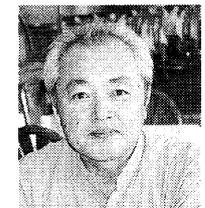
事務局 八木 又一郎 (高7回)

新年おめでとうございます。2002年はサッカーの世界カップで湧きました。また、株式の低下にも話題が大きく、なかなか世の中明るい話題が有りませんでした。事務局としては、皆様方に支えられ、何とか今年もやって来れました。同窓会はタテの社会ですが、活性化するのは横の繋がりが一番と思っております。皆様が、同期会等、横の繋がりを持って参加いただければと願っております。何かと不都合もあるかと思いますが、事務局としては精一杯やっていきたいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。



広報委員長 大橋 貞夫 (高10回)

会報は皆様の情報誌です。会員同士の楽しい交流を広げ、お互いの近況を知る情報誌にいたしたく存じます。その為にも、皆様の投稿をどんどん頂き、面白い会報作りには是非ご参加ください。皆様の日常の出来事・趣味、研究、スポーツ・名所、旧跡、名物・ご意見・思い出、随想・その他、写真も添付して下記へどうぞ。



〒158-0094 世田谷区玉川4-20-8 TEL03 (3709) 1570

大橋 貞夫 宛

東京同窓会・第45回大会報告

平成14年6月8日(土)松高東京同窓会の第45回大会が不忍池畔の東天紅上野店で開催された。正午開会の1時間前、実行委員会及び担当役員が集合して準備に取り掛かり、会場の設営を手際良く終えて同窓会員を迎えた。今回は会場の足回りの利便さと天候に恵まれたにも関わらず、会員の出足はいま一つ伸びず、総員85名でした。旧中、旧高女組は高齢のためか、年々出席率が落ち始めてきたので、今後は高卒組の協力と新会員勧誘に一層の対応を迫られる事になると思う。村松から伊藤淳一同窓会会長、母校からは坂井教頭、大塚担当教諭が御多忙中、遠路出席され母校の活動状況等お話をいただいた。さて、今回の総会は役員改選の年に当たり、前年度の経過・会計報告が異議なく承認された後、役員改選に入った。前もって数回の幹事会を開き役員人事を話し合い、過去19年間、会長を務められた佐伯会長が幾度も固辞されたが結局、幹事全員で数次の懇請、推挙により引き続いてお願いする事が決定した。会長からは新副会長4名、事務局長及び各委員長が推薦され、この役員人事は満場一致で承認され総会第一部を終了した。

1時半過ぎ、いよいよ第二部の懇親会開催となる。同窓のプロ歌手「杉 幸子さん」と、紅白歌合戦・のど自慢等でお馴染みの元NHKアナウンサー「吉川精一さん」の歌謡ショーが始まると会場の空気は一気に盛り上がりを見せ、村松から取り寄せた清酒「越後杜氏」を注ぎ合い、頬を染めた懇親の輪が随所に広がり始め、グラス片手の至福のひと時が過ぎていった。話し合いも一段落した頃合いに、お待ちかねの「外れなし」の抽選会がスタート。来賓や会員の寄進による景品は、当たって見てのお楽しみで、最後は会長特別賞の「越の寒梅」で締め括り、心躍らせた大抽選会の盛り上がりであった。やがて校歌、応援歌を熱唱の後、手締めにより閉会。高揚した気分のまま来年の再会を約し、めでたくお開きとなった。二次会は同館5階にて40数名が参加、今度は大カラオケ大会となり、歌って踊って大騒ぎとなる。そのうえ、吉川さん・杉さんに、引き続き三次会迄お付き合い願ったのは正に恐縮。皆さんのお陰で無事終了したことを心から感謝申し上げる。

(大会実行委員会・記)

東京同窓会・第45回大会収支決算書

平成14年6月8日 於「東天紅」上野店 (不忍池畔)

新潟県立村松高等学校 東京同窓会

収入の部 (単位:円)		支出の部 (単位:円)	
① 会員懇親会費	670,000	① 準備費 発送 330名	60,340
男子 55名 @9,000 = 495,000		会議費 4/13 (常幹)	17,040
女子 25名 @7,000 = 175,000		通信費 (葉書、切手)	43,300
計 80名		② 印刷費	9,350
② 祝儀	30,000	案内状、会費納入、他	6,050
同窓会本部 3名 = 30,000		返信葉書	3,300
③ 会員寄付金	27,000	③ 懇親会費	645,788
男子 11名 = 22,000		90名分 @7,000 = 630,000	
女子 1名 = 5,000		出演者懇談会費 = 15,788	
④ その他の収入	10,000	持ち込み酒代 (寄付)30本	0
二次会残金 = 10,000		④ 謝礼	140,000
		アトラクション謝礼2名 = 120,000	
		持ち込み酒謝礼 = 20,000	
		⑤ 来賓対応費	12,600
		土産代 = 12,600	
		⑥ 母校創立90周年記念品費	59,430
		新潟香月堂菓子 = 59,430	
		⑦ 写真撮影費	14,805
		DPE費 = 12,405	
		送料 = 2,400	
		⑧ 諸経費	4,227
		消耗品、礼品、宅配、交通費	
合計	737,000	合計	946,540
		収支差引額 (一般会計より補填)	△209,540
総計	737,000	総計	737,000

以上 報告いたします。(8月8日作成)

会長 佐伯 益一
財務委員長 塚田 勝

第45回・東京同窓会出席者名簿

平成14年6月8日(土)

於 東天紅上野店

新潟県立村松高等学校東京

来賓(4名)	旧中学校(7名)	高校男子(48名)	高校男子	高校女子(20名)
同窓会 会長	20 横松 宏平	02 青木 猛	09 石黒 四郎	05 向山 律子
伊藤 淳一 様	26 黒井 伊作	02 杵淵 政海	09 増田 訓英	
村松高校教頭	27 佐伯 益一	02 倉田 健五	09 間藤 謙一	07 深見 洋子
坂井 福作 様	30 五十嵐 一郎	02 篠川 恒夫		
村松高校教諭(同窓会担当)	32 笠原 健二郎	02 村川 五郎	10 新保 優	08 緒方 美恵子
大塚 崇 様	33 伊藤 勇五		10 鶴巻 浩	08 岡部 ユキ
元NHKアナウンサー	33 斉藤 和男	03 亀山 知明	10 関谷 雄二	08 片柳 ムツ
吉川 精一 様		03 渡辺 幸雄	10 宮澤 正由	08 川村 イク
		03 工 八郎	10 大橋 貞夫	08 木村 孝子
		03 根本 俊夫		08 波多 ミサエ
			11 田代 信雄	08 山西 愈佐子
		04 坂上 卓夫		
		04 下野 文幹	12 安部 實	10 小島 典子
		04 鈴木 健司	12 笠原 久	10 真水 道子
		04 大島 惣四郎	12 近藤 洋輝	
		04 鈴木 多喜男		11 風岡 智鶴子
			13 武藤 正昭	
		05 新井 康夫		12 近藤 燦子
		05 小黒 利雄	14 漆原 茂	12 徳永 道子
		05 金子 鶴男	14 山田 俊治	12 中島 和子
		05 山崎 豊吉		12 渡辺 厚子
			18 青木 敏和	
		06 佐久間 英輔	18 笠原 静夫	14 斉藤 弘子
		06 澤出 赳允	18 斉藤 正義	
			18 三室 茂和	20 安達 繁子
		07 遠藤 昭		20 三宅 紀子
		07 八木 又一郎	20 弦巻 功	
				21 小沢 幸子
		08 関塚 豪		
		08 塚田 勝		
		08 吉井 清		
		08 松尾 正春		
		08 村川 忠司		
		08 山崎 輝雄		
	旧女学校(5名)			
	23 大橋 也子			
	25 一氏 愛子			
	25 佐藤 玲子			
	25 鈴木 節子			
	25 佐藤 治			



校歌・応援歌を高らかに歌う



名司会(亀山・深見さん)



抽選会に景品寄贈された方々 (敬称略)

横松 宏平 (中20)	佐伯 益一 (中27)	笠原 健二郎 (中32)	斉藤 和男 (中33)
篠川 恒夫 (高02)	村川 五郎 (高02)	青木 猛 (高02)	倉田 健五 (高02)
渡辺 八郎 (高03)	鈴木 健司 (高04)	佐久間 英輔 (高06)	沢出 赳允 (高06)
塚田 勝 (高08)	石黒 四郎 (高09)	増田 訓英 (高09)	関谷 雄二 (高10)
宮澤 正由 (高10)	田代 信雄 (高11)	笠原 久 (高12)	
大橋 也子 (女23)	佐藤 玲子 (女25)	深見 洋子 (高07)	木村 孝子 (高08)
山西 愈佐子 (高08)	小島 典子 (高10)	真水 道子 (高10)	近藤 燦子 (高12)
徳永 道子 (高12)	渡辺 厚子 (高12)	斉藤 弘子 (高14)	

伊藤 淳一(同窓会長)

◎ご協力ありがとうございました。

◎なお、当日は受付混雑のため記載漏れがありましたらお詫び申し上げます。悪しからずご了承下さい。



旧高女のお嬢様方と



開会前の、ひと時



吉川さんの熱唱

平成 15 年度 東京同窓会開催のお知らせ

村松高校東京同窓会第 46 回大会

月 日 15 年 6 月 7 日 (土)

時 間 12 時 (正午) より

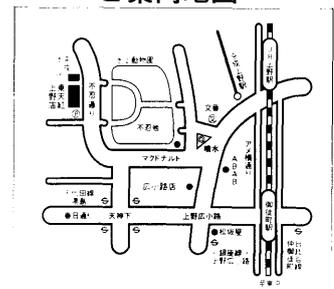
場 所 東天紅・上野店

住 所 台東区池の端 1-4-33
(上野不忍池畔)

電話 番号 03-3828-5111

交 通	JR・御徒町駅	徒歩 10 分
	京成線・京成上野駅	徒歩 10 分
	地下鉄千代田線・湯島駅	徒歩 3 分
	地下鉄銀座線・上野広小路駅	徒歩 10 分

ご案内地図



同窓会長 伊藤 淳一 (旧中33)

母校創立九十周年記念事業には、東京同窓会の皆様からご支援を賜り有り難うございました。

お陰様で案じておりました記念事業も、滞りなく終わり、胸をなでおろしております。一番心配しておりました募金は目標には及びませんでした。記念事業の費用を賄い、当初の念願であった後輩育成基金を若干ながら残すことになり、次の百周年へ向けての、なにがしかの原資を残すことができました。

PTAを通じて、母校村松高校と関係を持ちましてから、二十年あまり、七十周年、八十周年、九十周年と、お手伝いさせていただきました。自分の学んだ母校の時代を思い、切齒扼腕の思いを抱きながら、何とか嘗ての栄光への回帰を願い、螳螂の斧を振るってきましたが、すでに体力、知力も限界を超えてきました。

さきの五月二十四日の理事会で、正式に辞任を申し出て、次のより若い高校出身者を中心とした同窓生の活躍をお願いすることになりました。

東京同窓会には、今回で三回出席させて頂くことになりましたが、何時もそのご盛会ぶりに会長さんを中心とした人の和の大切さを羨ましく存じてきました。

恒例の福引に何か一品をとのご指示でございましたので、村松のお酒と五泉のお酒を若干お送り致しました。故郷を懐かしむ一助となれば幸いです。

長い間、ご指導有り難うございました。

村松高校 教頭 坂井 福作

過日は東京同窓会大会にお邪魔し、大変お世話になりました。郷里を離れて活躍していらっしゃる皆様にお会いし、心暖まるひとときを過ごすことができました。

また、その時の写真を頂き有り難うございました。

渡辺 八郎 (高3)

毎度お世話になっております。此の度もまた写真ご送付頂き、有り難うございました。

いつもご丁寧なお心遣い恐縮です。

過日の東京同窓会大会では、新執行部の顔ぶれを拝見させていただき、より一層の発展を期待できるやに感じました。それにしても此の度は、以前と比べ先輩方のご出席が大分少なかったように見えました。補充する意味でも、若い人達の参加を喚起したいものです。

殆どお役に立たないこ奴が、勝手なことを申しまして相すみません。ともあれ大御所の下、新執行部の活躍をお祈り致しております。

「東京同窓会々報」会員でもない私にまで送って頂き有り難うございます。佐伯会長の同級の誼みをもってのことと感謝しています。

昭和十八年、戦争が厳しくなった年に大学に入ったクラスの心ある友人が二〜三ヶ月ごとに出している便りが百二十号に達して今も続いている。この便りと『臥龍が丘は緑なり』は、何時も枕元において繰り返し読ませてもらっています。佐伯会長の心棒の存在に頭が下がる。それこそ、隅から隅まで読ませてもらっているが、今回は、特にお三方の寄稿は夫々に味わいがあり、しみじみと胸に感じるものがあった。

「頂上を極めない山行き」。叶うことなら、加藤氏の雑役係としてお伴したいと思った。思っても叶う今の私でないことは承知の上での話だが、私も湯ノ平温泉は二十代から憧れた所、十年前についにやってきた。それこそ私などの知らない大自然の生きた姿(やさしさも厳しさも含めて)を、ひっそりと見つめ、体で感じている人がいるんだというたまらない感動でした。

挿入された無人雨量局々舎の図も面白い、ペンの動きが伝わってきた。飯豊は、私も弥平四郎小屋から登ったことがある。

「傘寿をこえて」。亀嶋先輩の淡々とした文章の中に言いしれない味わいを感じた。境遇も違うけれども、いつの間にか氏の考え方に引き込まれている。なるほどと納得している自分に気づく文章である。

「兄の戦友」の伊藤氏の寄稿、戦死した兄の庄馬さんの戦友が義理堅く、戦場で約束した墓参を果たす話。その後の関係する人々との温かい交流、胸つまる思いで読みました。仏の縁とでも言うのでしょうか。小説のような話。

東京新潟県人会広報委員 市川 昭二

「臥龍が丘は緑なり」三十三号、ご惠送下さいまして有り難うございました。

伊藤さん(旧中)の「兄の戦友」、過ぐる第二次大戦で受けた心の痛手は現在なお癒し難し。同年代の者として感慨深く、感銘深く拝見いたしました。

「母校制服の変遷」は大変立派な企画と思いました。上の二枚の年代が付記されていれば、なお可。

④ 大正四年〜同十年頃の町立女子工芸学校及び実科女学校時代の写真と思われまふ。以後、村松高女となる。

杉(おざわ) 幸子 (高21)

松高の同窓会大会では吉川さん共々大変お世話になり有り難うございました。吉川さんも、良いご縁をいただいて!と、とても喜んでおられました。

また皆様にお逢いできる日を楽しみにしております。



お便りの中から

順不同：敬称略

津川町 田崎 正一

いつも同窓会誌ご恵送いただき感謝にたえません。隅からまで読ませていただいています。私も貴兄の驥尾に付すだけの勉学の志があれば、輝かしい松中27期生として卒業できたのですが家庭の事情に負けて、なんと一年位で中退してしまいました。

その後東京に遊学しましたが、学園の自由を認めない軍国主義の横行、軍事教練の強制に、秘やかな反抗精神に燃え、謂わば学校ジプシーの状態で正規の学校は全うしないで思春期を終えました。銀座の柳の下に辛うじて残った大正以来のデモクラシーの香り、神田の古本店の並びの中で、芥川龍之介の作品（発刊本がまだありました）を手にした満足感を打ち砕かれたのが昭和20年、戦争末期の徴兵でした。

東京の空襲がこわくて郷里、津川に戻ったのが皮肉にも歩兵第一連隊の疎開先である神奈川県川崎の62部隊。

歩兵として本格的に「それが日本の現役か！」と、しごかれました。本当は入隊即、中国南京に補充兵として渡る予定でしたが、沖縄に米軍が上陸して来たので、本土防衛に回され、出港していれば玄界灘か東シナ海で海の藻屑となっていた可能性が強いと思います。

ちょっといい話

伊藤勇五副会長が管理しているマンションの三階に若夫婦・子供一家が居住していて、彼はその子供さんを、とても可愛いがっていたそうな。そして時おり訪ねて来る父親に、娘さんがその旨報告していたらしい。一度だけ顔が合って目礼を交わしたことがあると聞いた。

先の東天紅での45回大会に、杉さんの紹介で、元NHKアナウンサーの吉川精一さんに来ていただいたが、お互いに顔を見合わせて、びっくり仰天。吉川さんが当の父親ご本人であった。

控室で、杉さんから詳しく話を聞き、改めて挨拶を交わしたという。不思議な縁である。吉川さんも、一変に緊張が解けたらしい。終始和やかな雰囲気になることができた。

世の中には往々にして、このような事がある。だから、人との出会いは大切にしなければならないと思った。(伯)



左より 伊藤副会長・杉さん・吉川さん・佐伯会長

九十九里浜で陣地構築中、終戦となり郷里に生還できました。33号に同期の白倉清熊畏友のお便りを拝見、柔道と海軍機関学校で優秀なこの方を含め、皆さんの長寿を祈るのみです。

大兄の力強くして悠然たるご活動に、ただ励まされるばかりです。拝眉の日を楽しみに——かたき握手を——

元NHKアナウンサー 吉川 精一

総会では、すっかりお世話になりました。伝統ある村松高校東京同窓会に、お声をかけて頂き恐縮、且つ感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

貴会の更なるご発展、心よりお祈り申し上げます。

小出 博三 (高8)

第45回の松高東京同窓会に出られず残念でした。次の46回を楽しみにしております。

過日、五泉の咲花温泉にて松高の友15人集まり、ホテル・平左衛門で水中花火を見て遊んで来ました。……懐かしい人もいて、心の安らぎとなりました。

これからも好きな風景画を画き続けたいと思います。



県立村松高校8回生同期会

塚田 勝 (高校8)

渡辺フミ先生(当年80歳)を迎え、還暦祝を五泉のガーデンホテルマリエルで105名出席から早や5年を経過、今年(平成14年)65才の節目を迎え、同期卒業251名中出席者89名(故人26名、ご冥福を祈る)での開催となりました。

次回より3年毎の集まりに決定いたしました。



去る平成14年4月20日ホテル新潟に於いて開催



同級会は持病の宣伝場？

旧中二十七回・同級会

「やあ～まだ生きていたか?」「うん、まあ何とかかな!」と、互い応酬し合う。これが去る十月二十三日、村松町・高松「金割鉾泉」で開かれた我ら旧中27回卒業朋輩の同級会の、一年振りの初言葉である。

午後、五泉駅に集合、迎いのバスにて一路、宿に向かう。見慣れぬ道を通るので、問うてみると近道だと言う縦横に道が走っていて「何とか農道」との標示板が随所に目立つ。農道にしては立派なものだと思った。

「いま走っている所が昔の蒲鉄の軌道敷の跡、県が買い上げてくれて道路を開設したのだ」「では、蒲鉄は随分儲けただろう?」「なんの・なんの、ま～だ・まだ赤字だ」と元蒲鉄重役氏は応ずる。宿には早めに着く。

写真屋が来るまで、着替えずに待てと幹事殿のご命令。卓を囲んで茶を啜る。今回の幹事は村松が当番である。

集まる朋輩十一名、今迄の例からすると、まずは妥当な数であろう。そして顔馴染みの村松の姐さま方二名、合計十三名なり。一人が顔を見せぬ、「さては拉致されたか」と口々に喚く、やがて現れる。「なにしろ汽車の接続が悪くてな」と言い訳しきり、タクシーで来た由。

今年もまた永年の常連ふたり、逝きたりと聞く。

(臼井、林) 寂しさが重く胸にのしかかる。

時を待つ間、欠席者の返信ハガキを回し読む。大半の者が病床、または通院中、足腰悪く歩行困難、家庭の都合等が主たる理由、話の中心となる。話が進むにつれて、今度は各自持病の自慢と宣伝。やれ、胃を切った、腰痛の手術をした、高血圧などと、蘊蓄を傾けての講釈が始まる。しまいには医学博士先生の講義となる。

元気であるのが気恥ずかしい程である。

どこの会でも、話題は先ず病気の事から始まるそうだ。年老いと、他に話題は無くなるのであろうか?

記念撮影も終わり、物故者への黙祷の後、宴会に入る。「サエキ、お前が乾杯の音頭をとれ」と言う「だから俺はこんな処に座るのが嫌やなんだ」と言うが皆が承知しない。席は正面中央、東京同窓会長の肩書きのせいかな。

皆、膝で歩き乍らお酌して回っている。だから誰も箸を持つ暇がない。五・六杯、喉に流し込んでから、漸く膳に手がつく。土地柄のせいかな鯉料理や山菜料理が多く豪華である。座は次第に盛り上がってゆく。カラオケが始まり、ダンスに興じ、村松姐さまは下着丸出して笑い転げる。先程の自慢の病気は一体何処へ失せたのか?

……間もなく傘寿を迎えようというのに、だ!……

かくて 霜降の夜は更けてゆく。

まだ四時だというのに早起きの者二人、声高かに喋っている、然も飲んでる。「ウルセー・寝てらんね～」と文句を言いながらも起きて仲間に加わる者、多し。

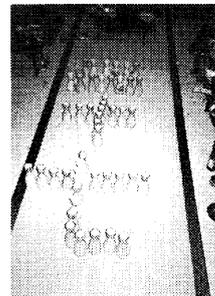
朝食時にまた酒盛りが始まる。よく飲むね～と互いに感心しあう、幹事が「実は、もう皆、高齢だから、この会も、そろ々止めて後は自由に集まるようにしたらとの意見があるが…」と紹介したとたん「バカ言え継続だ」と一瞬にして否定されてしまった。

さすがに莫逆の友の集まりだなと痛感した。

而して、15年度の当番は新津、次は新潟と相成った。手回しが良過ぎるの感じ。十時解散となる、再び宿の車で送ってもらう。幹事ご苦労、諸氏に感謝、健在なれ。

… あと言うことなし。…

(佐伯 記)



から鏡子で画く二十七



宴会は、かくの如し



卒業後初の同級会 昭和19年1月6日 五泉馬場の文福にて兵隊前の最後の正月と書いてある。8人の友が亡くなっている。連絡として今日まで続く。

☆ ————— ☆

村松町「金割鉾泉」での同級会参加者十一名。

長い年月を過ごした事実が証明されたような参加数であったが、皆、元気で齢を感じさせない雰囲気であった。

青春真ただ中の五年間を共に過ごし、夫々の道を歩いて六十数年の年月が流れ、今、再び逢える幸せは感激以外の何ものでもない。亡くなった同級生諸君の御冥福を祈り、生有る同級生諸君の御健康と在京同窓生諸君の御健闘を祈る。(村松当番幹事・土田式蔵)



旧中 26 回同級会所感

田澤 泰 (五泉市在住)

今年はW杯の六月を避けて、七月三日弥彦温泉・「みのや」に、十三名の同期の友が参集して、同級会を開催いたしました。最初に写真を撮り午後七時、亡き友達に黙祷を捧げてから、角田君の開会宣言で開宴になりました。アトラクションにお願いしていた民謡クラブのお一人が突然の不幸で、全員出演できなくなり、大変困りました。しかし若女将が再交渉の結果、一時間程して民謡の人達十余名が来て、歌や踊りを六曲ほど披露してくれました。なかなか味わい深く、良い気分になりながら八時半頃アトラクションが終わりました。舞台のカラオケで角田君が歌い始め、続いて宮川君ほか三名が歌ったところで、若女将が「予定を狂わせて申し訳御座いませんでした」と詫びて、特典の鯛の姿造りを一品ずつ供し、更に宿の女衆三名が出てサービスしてくれました。この若女将の見事な捌きに、一流旅館の誇りと意地を見せてもらったと痛感しました。お陰で心地よく穏やかに時は過ぎ、楽しい歓談も時を忘れて続けましたが、十時半に宴会を終わり、皆それぞれ真っ直ぐ部屋に戻って寝ました。何時もならこれから夫々活動するのに、終わり良ければ全て良しの日でした。翌朝は七時に別棟七階の展望レストランでバイキングの朝食でした。こんなに大勢の人が泊まって居たのかと吃驚するような人数で、二百名以上も居たでしょうか。山と里の澄みきった風景を眺めながらの朝食で十分に満足し、やがて来年を約束して散会になりました。「やあ元気かね」と声を掛けた瞬間から総て分かり合う不思議な関係、臥龍ヶ丘を巣立ってから六十有余年、奇しき時代の狭間に揉まれながら生き残ったと言う実感、同じ時間と空間を呼吸した想い、これが同級生なんですね。明日の祖国の独立再生と、三百十万人の犠牲の上に得た平和と、この永遠不滅の心の継承こそ我等の使命だと心に誓いました。「さあ愈々八十の台大、新しい出発だぞ」と言うのが、今日の同級会における私の感想でした。同級の諸兄の健康を念じつつ筆を擱きます。(今年の幹事は五泉の角田、窪田、黒井、田澤の四名、来年の幹事は村松です。)



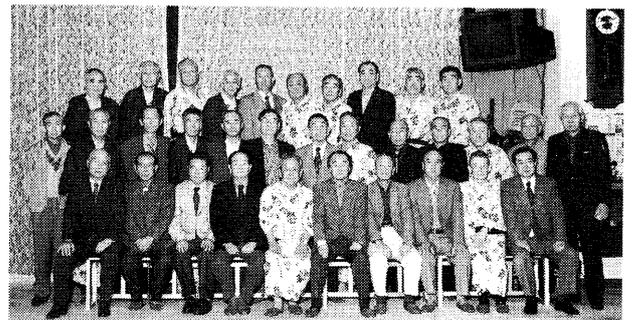
平成14年7月3日 県立村松中学校 第26回卒業生同級会 四季の宿 みのや

松城終始会を振り返って

(村松中学校第33回・村松高等学校第1回卒業)

斉藤 和男 (旧中33)

松城終始会は昭和18年(1943年)旧制村松中学入学から昭和24年(1949年)新制高校卒業まで軍国から民主化への激動の6年間、共に学び共に遊んできた男子180名からなる同期の集まりである。今年は津川方面在住者が幹事となり10月16日三川温泉で開催された。52年の月日が流れ、時代も新しい世紀に移って、私共も72歳と年輪を重ねて来た。往時茫渺として、この間多くの友人を黄泉に送り、晨星落落たる寂しさも感じているこの頃、あとどれ程の命を保てるのか知る由もないが、近年、開催年毎の終始会には友人の顔を思い浮かべつつ、皆元気で参加してくれるのかを気にしながら出席している。残念ながら、今回は34名の出席にとどまった。欠席者のご自愛を祈りたい。故郷にも開発の手が加わり様変わりしたもの、まだ懐かしい姿も多く残されている。何よりも霊峰白山、菅名岳を仰ぎ見る事と、変わらぬ人情の温かさに触れるとき心身共に安らぎを覚える。次回の終始会は平成16年新津・新潟在住者の当番になるが、健老でありたい。再会を約し「この時吾々なお若く、そして健やかなり」を唱和して散会した。



松城終始会 平成14年10月16日 於 三川温泉 力館

ちょっと変な話

平成14年8月5日に新しい住民基本台帳法が施行された。いわゆる11桁の国民背番号制である。ひとつ数を間違えると、とんでもないことになる。お国が決めた事だから仕方がないと思うが、何の為かさっぱり分からない。

私が死んで、もし墓を建てる時には、たとえば『三一四一五九二六一三五 之墓』とせよ、と家族に申し渡してある。嗚呼! (白)

『古希を祝う』第4回生(27年卒)同期会

鈴木 健司(東京在住)

平成14年10月21日(月)月岡温泉ホテル泉慶の「華鳳」館に70名が集いました。

第4回生の同期会は現在、隔年開催となっています。今年は昭和8年生まれの多くの同期生が、「古希の年」を迎えましたので『古希を祝う会』の副題付の同期会となりました。その記念から「旧交を温めお互いの健康を祝し合う」舞台に「豪華ホテルを選ぼう」ということになり、その結果が月岡温泉「華鳳」でした。

その豪華さを承知の方々はさておき、遠来組の一同は先ずは豪華・デラックスなホテルにびっくり。「さすがは古希を祝う会だ」と到着の時から盛り上がりを見せ、参加者は70名と『古希を祝う会』にピッタリの人数の大盛会となりました。

記念写真撮影の後、地元の唐橋美明会長挨拶・物故者への黙祷・開会の乾杯と続いて懇親会となりました。懇親会と宴終了後の各部屋での懇親・懇談も大変な盛り上がり様となったのですが、その要因となっているのであろう、我々の特殊な時代背景に触れてみます。

①敗戦による価値観・歴史観・社会の激変体験の共有。
②疎開児童生だった東京育ちの方々、外地引揚げの方々
と机を並べたこと、異文化の衝突でした。③旧制中学校へ最後の入学をしたため、高校1年生までの4年間は、常に最下級生だったことと、多くの同期生が一つの学校で6年間一緒したことの連帯感。④村松高等女学校との合併のため、全国ペースに比べても、かなり早期からの男女共学。⑤日本の高度成長を支えた自負心と、古希を迎えたお互いの健康への祝福と感謝心。等々でしょうか。

翌朝、次の再会を祈願して、名残り惜しく別れました。

会長さん、幹事さんの皆様、ありがとうございました。次回も元気に集えますようにお世話下さい。



村松高校 第4回卒 同期会
於 新潟の奥座敷 月岡温泉ホテル泉慶 華鳳 平成14年10月21日

鹿其麟山に轟く我がが歓呼

雲村 俊健(高5回)

ひとり静かに老後をたのしむのも悪くはないだろう。だが、高校時代の仲間たちが肩を組み合って遠い青春を回顧することは、参加した人でなければ味わえない、しびれるような歓喜であった。

ときは平成14年十月二十六日。ところは東蒲原郡鹿瀬町、麒麟山温泉『福泉』の大宴会場。集まった面々は昭和二十八年の卒業生である。年齢でいえば、六十七歳か六十八歳となる。髪の毛が白くなるのも無理はない。

この会は、『松五会』と名付けて、平成元年に誕生した。村松高等学校第五回生の集いを短縮した呼び名である。今年で数えて十三年目となった。したがって、『第十三回・松五会』を開催したという言い方が正しい。

では、なぜ鹿瀬が集合地に選ばれたのか。

「あの頃は、朝早う家を出て、磐越西線・蒲原鉄道に揺られてさ、村松を目指し、松高への道を急いだもんです。向学心に燃えていたがんだわね。いまでも、いい思い出になってますよ」

そう語った仲間の言葉に胸を打たれた為である。だが、鹿瀬への道はまだ遠くて不便だった。参加者は二十八名。しかし、こんなに熱い友情は滅多にあるものではない。

予想どおり、宴会は盛り上がった。ここは東京同窓会の会長・佐伯益一氏の出身地でもある。地元の酒が振る舞われた。さらに、出席できなかった仲間からも、酒や祝電が届けられた。やはり、『松五会』は不滅だったのだ。

部屋を変えて、二次会に移る。歌った、飲んだ。誰もが青春の顔に戻っていた。

「おおっ、あんげに一杯あった酒を、俺たち、みんな飲んでしたのか？ 物凄え！」

これが翌朝の全員がもらした第一声であった。来年は、いよいよ松高卒業から数えて五十周年を迎える。

ひとり家にこもって老後を楽しむなんてわけにはいかないかもしれない。



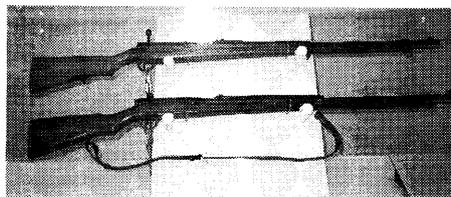
母校制用長の変遷について (其の二)

佐伯 益一 (旧中27)

私が村松中学校に入学したのは昭和12年春のことで当時の世相は「国際情勢まさに風雲急なり」などと喧伝されていた時代であったが、私たちの周囲はまだ穏やかであったようだ。然し、村松という所は古い城下町。まして、歩兵第三十聯隊が駐在していたから、軍都として学校の規則等は特に厳しく極めて封建的でもあった。

そして、それは先ず服装から始まった。入試に合格すると入学のための説明会があり、教科書や辞書の購入方法などの他、制服等の採寸もあった。五年間着用するのだから大きめに作るようにと、言われた記憶がある。服は黒の木綿、上下とも総裏付き、だから冬場でも、股引(ズボン下)をはく必要がなかった。驚いたことには、ズボンの両脇のポケットが無いことであつた。これはポケットに手を突っ込むことを禁じていたからである。上着のボタンは平型に校章入り、軍隊と同様、伏せをした時、ボタンが胸に食い込むのを防ぐため。袖の飾りボタンも無く、剣吊りが着いていた。

学年を示す襟章は簡単な1~5までの算用数字、他校のI~II...Vの数字には何かしら引け目を感じていた。級長は反対側の襟に桜の徽章が二つ、副は一つ着けていた。最高学年の五年生は三つ。今の生徒会長のことか。どういう名称であつたか覚えていない。服装は通学時も軍事教練時と同じで上着の右肩は鉄砲の油で何時もピカピカに光っていた。三八式歩兵銃は重かつた。



靖国神社遊就館に展示されている三八式歩兵銃



剣吊りがついていた

襟には白いセルロイド製のカラーを付けるが、これが痛みやすい。毎度のことだが、これを付けていないと、「すぐ買ってこい」と怒られ購買へと駆け込む。金が無くとも伝票で事が足りた。ホックが外れていると「生意気だ」と言われて上級生から殴られた。余談だが、卒業近くなると、この仕返しに後ろからマントを被せ、ポカポカやったものだ。

登校・下校時には必ずゲートル(巻き脚絆)編み上げ靴着用が義務づけられていたが、多くの者は総ゴム製の短靴であった。支那事変の進展に伴い、一年後に物資愛護の意味から下駄履き通学となったが、これはなんとも格好のつか



ないもので、間もなくゲートル巻きも廃止となった。

下駄では一か月もしないうちに磨り減ってしまうので高足駄を履くようになった。中には厚さ3糶もある台に白い太い鼻緒を付けたり、天狗様よろしく一枚歯の足駄で通学する豪傑肌の先輩もいた。

やがて喇叭(ラッパ)ズボンが流行るようになる。

ここで、ゲートルについて、ちょっと触れておく。ゲートルの幅は約9センチ、長さ2.4メートルで黒、カーキ色がある。一般的にはカーキ色である。カーキ色は当時、国防色といわれていた。ゲートルの末端の縫い目とズボンの縫い目が直線に揃っていないと怒られた。ゲートルの効用は、

- ① ズボンの裾を纏めるので行動や作業がし易い。
- ② 下脚、特に向こう脛を怪我から護る。
- ③ 脚が軽くなって長距離の歩行が楽。等々である。

黒色のものは、昔は警察官、役所の土木作業員等に、主として用いられていた。

高学年になると体が大きくなるので服が窮屈になる。したがって両脇や袖に間地布を入れる。同じ生地がないものだからスフで用立てる。膝や尻は「当て布」だらけで真に見事なものであつたが、誰も気にする者はなかつた。一級下(28回生)の学年は入学時から全員カーキ色であつた。服も帽子もである。然し、これは一期かぎりではなくなつたようだ。理由は知らぬ。

因みにカーキ色と言うのは、種々様々な色を混ぜ合わせると、この色になると聞いたことがあるが、試した事が無いので真偽の程は分からない。

毎年、6月と10月の初めには全校一斉に夏・冬制服の衣替えがある。替えていないと事情を訊かれる。それほど規則が厳しかつた。夏服は霜降りであつた。

帽子については、これは、ごく普通。小学校以来の帽子をそのまま被っていた者もいたが、途中で新品に替えると「ニュー・ニュー」とからかわれるので帽子の裏生地を切りとり、一度泥水に浸して水洗いのうえ、形を崩して着用する者が多かつた。中にはワザと剃刀で裂き、白糸で縫っていた者も居た。私などもその一人である。

だが顎紐だけは頑丈であつた。白い貝殻ボタンで裏はリングで留める。容易に外れぬためか、ここにも軍隊調が窺われる。学生の表徴といわれる白線も勿論なし。

帽子に白線をつけるのは、同じ地域での他校との区別か、または学校の権威、象徴を示すためのものであろうか、創立当時は、無駄であると考えられたものか？

さて、最後は通学用の背囊である。私の入学時は三年生から背囊を背負って通学していた。刑務所で作られたもので、当時は五円であつた。



それも私達の一級下で終わりだったと思うから背囊使用は通算四カ年ぐらいの間か。これも物資愛護の影響であろう。背囊には校章の刻印が押してあった。

他は野外演習や行軍等には軍隊払い下げの明治時代の(たしか犬だと思うが)毛皮付きの背囊を借りていた。学校は修理費と称して10銭を徴収していた。卒業近くになると各人は背囊や教科書、ノートを身内や知り合いの下級生に譲り渡していった。

教練や行軍には、大半の者が農・鉱用の底の厚い地下足袋を履いていた。五年生の時、長岡市近辺で県下中等学校の教練特別大演習が行われ、長生橋を渡る時、足の裏がとても痛かったのを覚えている。

中学三年の夏、私は運動のやり過ぎから肋膜炎を患い、許可を得て使用を免除してもらったが快癒してもそのまま風呂敷やブックバンドを使っていた。だから、背囊は新品に近かった。卒業する時にその背囊を譲ってくれと言うのがいた。「十円でどうだ?」と言ったら「それで良いです、お願いします」と言う。それで譲ってやった。

実は、その人が今の伊藤副会長である。五円を返さねばネ〜ナと、今も慚愧の念でいっぱいである。



雨降りの日は、絵のような格好での登校で何とも冴えないものであった。当時は洋傘など誰も持っていなかったのだから、〇〇旅館とか△△鮮魚店とか大書された傘を持つての通学生もいた。一時凌ぎの転用だったか?。
(昭和13年頃である)



波乱万丈「松中同級会」のこと

文責・五泉支部 金子 昭三

普通に申せば「松中第〇〇回卒同級会」となる所で、私たちの同級会は、さしずめ「昭和20年卒(第30回4年卒)」となる。然るに、卒業だけでなく「昭和16年入学」が付加されている。と申すのは、16年4月入学の同期生の中で、3年生の18年11月には、樋口三郎君と伊藤勇五君が若冠15歳にして13期甲飛予科練習生として中退する。続いて翌年3月になると数名の者が、14期甲飛として中学を後にする。4年生になると海兵・陸士といった士官養成学校や、甲飛予科練志願で中学を去る。また、残った人の大半は、学徒勤労動員と称して19年8月、4年生時横浜へ、間もなく横須賀海軍航空技術廠での軍需生産に駆り出される。事情があつて残った者も、地元工場に動員されている。揚げ句の果てに、一級上の5年生と同時の4年制繰り上げ卒業と相成る。松中入学から4年間に、中退あり、学業を離れての集団生活、病による留年ありで、同時に卒業証書も貰えない者が多数居たという「波乱万丈」の同級達生である。

そこで『同窓会員名簿(松高同窓会)』をひもといてもらいたい。『昭和20年3月卒業(第30回)』には、繰り上げ卒業の証として「4年制」という特別扱いの名簿が掲載されている。この中には、前記の通り中退者も、留年者も、昭和16年入学者全てが名簿に載っている。卒業証書が無くとも、特異な時代背景を考慮した名簿である。これも、地元同窓会理事である林寛君の「絆」を固める温かい配慮と名簿作成に当たり、同君の強い申し入れに依る所が大きい。復学については、人それぞれだが「昭

16入学、昭20卒(第30回4年卒)」の仲間は、平成5年に「臥龍原頭幾星霜」(A5版230頁)という文集を発行し、何の違和感も無く「松中同級会」で旧交を温めている。今年9回目、来年は新津地区担当の10回目の同級会が待っている。
東京同窓会員の皆さん、益々のご健勝を祈っております。



ちよつといい話

粉クスリを飲んだが、水によく溶けず「洗濯板」に張り付いて困った、と言ったら「洗濯板」とは何ですかと訊かれた。「洗濯板」とは口腔上顎部の波状のギザギザのことだと子供の頃に教わった。簡易な洗濯用の板のことで、電気洗濯機が普及するまでは各家庭で愛用されていた。言い得て、懐かしい言葉であるが今の人達はこれを知らない。電気洗濯機しか知らないからだ。諸々の事柄について故事来歴、言葉の語源を勉強するべきであろう。横文字ばかりが能じゃない。ついでに言うが、酒を飲んだ後は、この「洗濯板」に酒の匂いが染みつくので、嗽をする事が肝要、煙草もまた然り。人間関係の気配りとしての最小限のエチケットである。嗽には、お茶が一番良い。また歯周病予防のためにも。(伯)

佐渡紀行

真水 道子(高10回)

佐渡へ 佐渡へと 草木もなびく~~~~~

今から40数年前になりますが、私が松高在学の頃、運動会に披露する佐渡おけさや相川音頭を、両津出身の近藤先生から熱心に指導を受けたものでした。全校生徒がグラウンド一杯に輪を作り、制服姿で踊る佐渡民謡も格別の想いがあります。やがて月日が過ぎ、東京同窓会で北区新潟おけさ会の皆さんがアトラクションに出演した時、懐かしさで私も早速入会をしました。後日、本場の佐渡で立浪会の踊りを見る機会があり、その素晴らしさに魅せられて仕舞いました。8年位前から佐渡へは年に6回程訪れ、4年前に約1年間立浪会で踊りの研修をしながら佐渡会館の舞台にもたち、今でも各イベントへの参加や、時には講習等で訪れています。

今回、同期の有志で佐渡の伝統芸能、史跡、神社仏閣等を1泊2日と短い日程でしたが楽しんできました。佐渡は自然の宝庫で、いつ訪れても春夏秋冬の美しい色合いと、素晴らしい風景を見ることが出来、心の洗濯になります。10月20日、両津港で昼食を終えてレンタカーに乗り、大佐渡スカイラインを走行して標高800メートルの白雲台に到着しました。ここからは真野湾が一望出来左手には両津港、後は佐渡で最高峰の金北山(1117メートル)、そして右手には相川町と、佐渡島が8の字型に広がっている様子が良くわかります。また紅葉が見頃となり、黄色に混じってウルシの赤が目眩しい程で、印象的でした。相川町に下り佐渡金山に向かって行くと、目の前に道遊の割戸(金鉱の採掘で山が割れた)が現れます。金鉱の崇太夫抗に入ると、当時の風体をした電動の人形が江戸時代の採掘現場を再現しており、胸がジーンと熱くなる光景でした。複雑な思いを胸にして、次の相川町技能伝承展示館を訪ね、無名異焼(相川独特の陶器)を体験することにしました。ロクロの上に置かれた500グラムの鉄分が多い赤土で作品作りに熱中し、指導者の手を借りながらも1時間程で各自が見事オリジナル湯呑を作成しました。1ヶ月後に焼き上がった湯呑が送られて来るのを今から楽しみにして居ます。宿泊は、佐渡で唯一海底から湧き出る温泉の「ホテルひらね」で、つるつるの湯に癒されて楽しく夕食を終えました。一休みして思い出の佐渡会館で、立浪会の伝統芸能を十分に堪能して来ました。翌朝あいにくの雨でしたが、海岸沿いに真野町へ向かい、北朝鮮拉致問題でニュースになっている「曾我ひとみさんお帰りなさい」の立て看板や、テレビ取材車等を横目で通過して、佐渡歴史伝承館に到着しました。館内は、順徳上皇が佐渡配流となり46歳で崩御される迄の説明が第3景まで続き、次いで日蓮聖人や佐渡伝説等、森鷗外の山椒太夫、木下順二の夕鶴、そして最後はおけさ伝説など、佐渡の歴史がここに凝縮されており、

何度見ても感慨深いものです。帰り道、妙宣寺の五重塔(国重文)、清水寺(京都の清水寺を一部模して作った古寺)に車を止め幽玄の趣を鑑賞しました。

佐渡は、能が大変盛んで両津の「能楽の里」では20数体のロボットが蒔能の道成寺を演じています。能を見る機会が余り無かった私には、本物の人間に見紛うほどに精巧に作られ動く能舞台の演技は、魅力的なものでした。今回の10期生有志による初めての佐渡国訪問は短いとは言え大変有意義で楽しい旅でした。東京同窓会の皆様にも、一度は訪れて頂きたいと思っております。新潟県の中でも、ちっと異国を思わせる独特な感じの佐渡の島は、おけさを愛する私にとって第3の故郷でもあります。

佐渡は寝たかよ 灯も見えぬ~~~~~



上は白雲台の紅葉

下は妙宣寺の五重塔(国重文)



佐渡民謡、越後民謡へのお誘い

『生涯青春』を合言葉に、私達好謡会では仲間作り、健康作りに週1回汗を流しています。又、年間を通して関東の祭イベントで佐渡おけさ流しや、本場の佐渡のイベントにも参加しています。この度は東京同窓会の皆様には是非とも故郷を懐かしむ心で、踊りの輪と人の輪を大きく、心の和を大切に楽しく踊ってみませんか。男女を問わず、健康に自信のある方なら結構です。皆様からのご連絡をお待ちして居ります。

* 稽古日：木、土、日、午後1時半~4時半

* 場所：荒川区日暮里

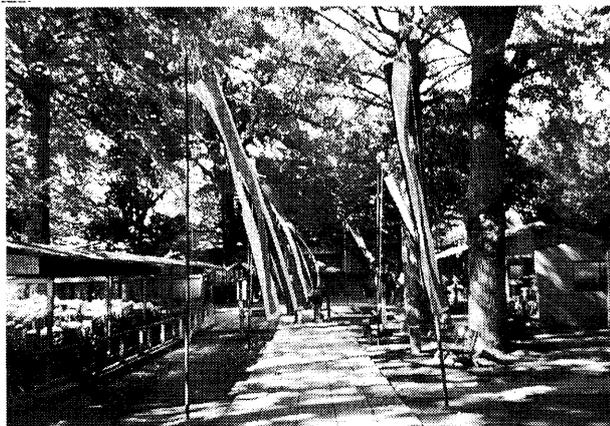
* 連絡先：好謡会 会主 真水道子

電話/FAX：048(252)0186

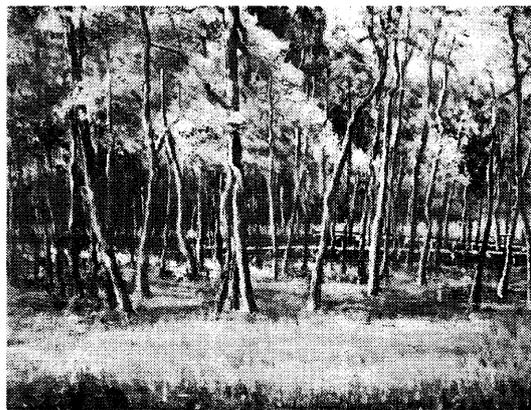
等々力溪谷と不動尊

大橋 貞夫 (高10回)

大井町線等々力駅から徒歩1分にあるゴルフ橋の石段を降りると、都内唯一の溪谷がある。夕刻には会社で飼っている犬の「太郎」を連れて、時々散歩に出かけるが台地と谷との標高差が10メートルあって、騒音も溪谷までは届かず、鬱蒼と茂る兩岸の樹木は頭上を覆って、静寂な溪谷美を堪能できる。この溪谷は国分寺崖線の最南端に位置する開析谷で、谷間は粘土・砂礫・赤土（関東ローム層）の層が重なって、地層の移り変わりを見ることが出来る。玉川全円耕地整理組合が、昭和五年から十三年にかけて谷沢川の流路を整備し、小径を設けるまでは、殆ど人の立ち入る事もなく、雉などの鳥類やイタチ・キツネなどの小獣類や多種昆虫類の宝庫であった。遊歩道の途中にある橋を渡ると公園（トイレあり）があり、その先には「等々力溪谷3号横穴古墳」がある。これは谷沢川東斜面の崖に群集している横穴の一つで古墳時代末期から奈良時代のものと推定され、野毛地域の有力な農民の墓である。遊歩道を更に進むと不動尊の裏手に出るが、急な石段の上り口の右手には茶屋があり、左手に等々力の地名が起ったとも云われる不動の滝（龍頭の滝）がある。国分寺崖線の湧水であるこの滝は夏冬枯れることなく、行をする修行僧が各地から訪れ、役（えん）の行者ゆかりの霊場と言われている。等々力不動尊は満願寺の別院で、境内の広さは1500平方メートルあり、開山は興教大師である。本尊の不動明王は、役の行者の作と云われ、興教大師が山城国（京都府）からこの地に移したと伝えられる。因みに興教大師（1095～1143）は覚鑿上人といい、高野山を再興して和歌山県に根来寺を開創した真言宗中興の祖である。元旦の等々力不動尊は、初詣の老若男女でごった返す。少し間を置いてからの静かな参拝がお勧めである。



10月28日から11月23日まで菊祭り
その他、年中各種の行事がある



湿原の春 F 8号



尾瀬への道 F 15号

◆ 上に掲載の油絵は、小出氏の作品

——個展のお知らせ——

第5回 小出博三氏(高8)油絵展

■ 会期 2003/3月2日(日)～3月8日(土)

AM11:00～PM7:00 最終日はPM5:00まで

■ 会場 東京交通会館B1(シルバーサロンA)

千代田区有楽町2-10-1 Tel.03-3215-3826

JR有楽町駅・京橋口正面

お問い合わせTel. 047-448-9632 (小出)

怒らないでください

茶髪が大流行である。老若男女を問わず、小・中学生から幼児まで、それこそ猫も杓子もという昨今である。美しくありたい、目立ちたいという心情、分からぬでもないが、もう至る所茶髪だらけ。日本古来の「みどりの黒髪」は一体どこへ消えたのか？黒髪の方が珍しい。

ならば、三毛猫風もまたよし、いっそのこと眉毛から下の毛まで全部染めたら、というのが大正老人の理窟である。 ゴメンナサイ。(白)

2002年 主な出来事

2002年・新成人 152万人 (男 78万、女 74万)

- 1月
 - ・元札幌国税局長、脱税疑惑で逮捕
 - ・殖産住宅が倒産
 - ・雪印食品、牛肉に偽装ラベル発覚
 - ・NGO排除問題で国会混乱・田中真紀子外相更迭される
- 2月
 - ・第19回 冬季オリンピック開催＝米国
 - ・国後島「友好の家」など支援事業疑惑
 - ・スターゼン、鶏肉偽装発覚
- 3月
 - ・徳島県知事、公共工事収賄容疑逮捕
 - ・ユーゴの国名が消滅、新国名はセルビア・モンテネグロ
 - ・東京都心、春分の日に桜満開
 - ・日産建設、倒産
- 4月
 - ・公立学校、週5日制スタート
 - ・中国機、韓国釜山で墜落、死者 118名
 - ・第一家庭電器、倒産
 - ・福岡県で保険金殺人容疑の看護師 4人逮捕
- 5月
 - ・米穀販売店 1万7千店で不正表示発覚
 - ・中国・瀋陽総領事館事件発生
 - ・ダスキン、肉まんて食品衛生法違反
 - ・川奈ホテル・ゴルフ場、倒産
 - ・31日、日韓共催サッカーW杯開幕
- 6月
 - ・鈴木宗男議員、あっせん収賄容疑で逮捕
 - ・W杯で興奮し道頓堀へ2千人ダイビング
 - ・帝京大、簿外処理金 90億円発覚
 - ・18日サッカーW杯で日本はトルコに惜敗

- 7月
 - ・10日 台風6号 関東に上陸
 - ・16日 台風7号 関東を直撃
 - ・01年日本人平均寿命男 78歳、女 85歳
- 8月
 - ・欧州、エルベ川、ドナウ川で大洪水
 - ・日本ハムがBSE対策で偽装と隠蔽発覚
 - ・アザラシ (たまちゃん) 多摩川に出現
 - ・目黒雅叙園、再度経営破たんし倒産
- 9月
 - ・2日、東証一部・日経平均 9521.63円
 - ・長野県知事に田中康夫氏、再度当選
 - ・丸ビル完成、高さ 180m地上 37階
 - ・大阪・中座と法善寺横丁焼ける
 - ・国内の百歳以上は、17,934人
 - ・17日 小泉首相、北朝鮮訪問
- 10月
 - ・千代田区、路上喫煙罰則条例施行
 - ・三菱重工長崎造船所で建造中の、11万3千トン全長 290mの豪華客船火災
 - ・台風21号、茨城県で送電塔9基折れる
 - ・ノーベル物理学賞と化学賞は日本人二人
 - ・北朝鮮に拉致された5名一時帰国
 - ・バリ島で爆弾テロ、187名死亡
 - ・モスクワ文化宮殿劇場で人質テロ事件
 - ・民主党、石井紘基衆院議員刺殺される
 - ・プロ野球日本シリーズ、巨人4連勝
 - ・31日、東証一部平均株価 8640円 48銭
- 11月1日 巨人・松井選手、米大リーグ移籍表明

12月1日・東京臨海高速鉄道 (新木場～大崎)
天王洲アイル～JR大崎間開業
・東北新幹線、盛岡～八戸間 96.6Km開業

編集後記

北朝鮮に拉致された方々が帰国後、懐かしい故郷で過ごすうちに、やがて自分の思いを話す様になった。政府機関の関係者の説明だけでは、そこまで心を開く事はなく、家族、友人、近所の人達の暖かい愛情と思いやりの中での話し合いがあればこそと思う。主義主張や制度、理窟でいくら説明しても、理解して貰うのは非常に難しい。同窓会はタテ社会である。しかし、同じ学び舎を巣立って、実社会の荒波にもまれ人間関係に疲れ果てた時、ホント気を許し心の安らぎを覚えるのが同窓会の存在であると思う。相互信頼と相互に敬意を払いお互いを思いやる気持ちが無ければ、楽しい語らい等とても出来はしない。理想や主義主張で会の運営をすれば、とても居心地の悪い会になる。

最近、六月に催される東京大会の出席者が、少しずつ減り始めている。会員の高齢化も一つの原因ではあるが、会自体の体質にも、少なからず原因が有るように思う。会員の減少を補う為に、会員を勧誘するのは当然であるが、会の拡張と共に会の居心地のよさ、楽しさ、魅力を作り出す工夫も大事な事と思われる。

ペットボトルに水を入れパウダーを少し入れると、五分くらい吸える量の酸素を発生する商品が出来た。頭が「カーン」となった時や、息苦しい時に吸うと気分が落ち着くのではないかと思う。ちなみに酸素の元素記号は「O₂」(オーツー)である。吸ってみたら、なかなか「乙」な味がするに違いない。

広報委員会

——表紙について——

表紙の写真は1999年から工事を始めて2002年9月6日オープンした新丸ビルの姿である(36階建)。旧丸ビルは大正12年に完成し、約70年の歴史を刻んだ後、新しいビルに建て替えられた。
写真撮影と資料の提供は、沢出趙允氏(高8)による

平成15年1月 第34号

表紙の題名・題字は、佐伯益一氏(旧中27) 書
発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会 広報委員会
事務局 〒157-0061
世田谷区北鳥山3-18-20 (八木 又一郎 方)
電話・FAX番号 03-3307-1048